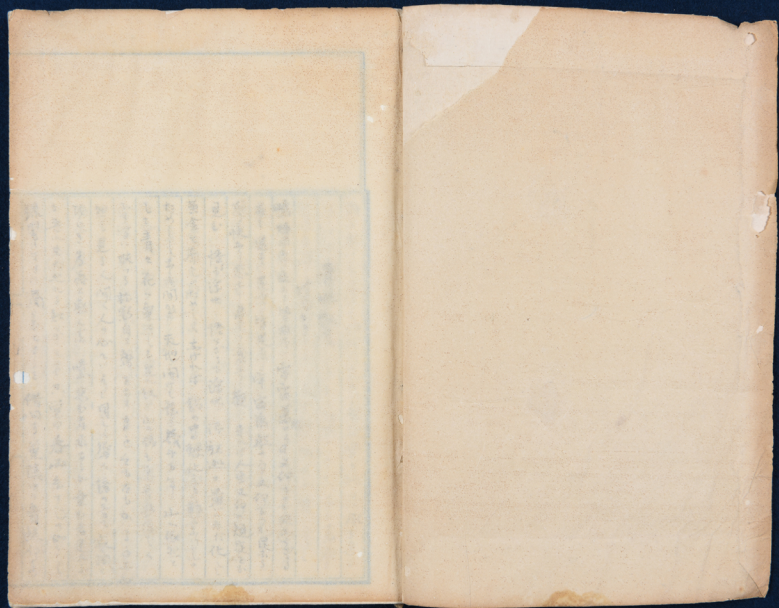


三
魁



か
明

(二)

冬まり春まじり今日の花見雲仰所とあらむも流れ
おかしき白雲一ふれ二ふれ三ふれ 蒼林現空しく燕花自ら
寂靜 流水も小川の根を流してあふく清らかな
かゆふ かく内然 かく人皆 かく歳を来りし所を
やあふ 然も年を感てまふや昔の春にあふ 空し
く人多感つ詩人といふ 青春と惜む 雲は流れぬ

(三)

樹々の影は白く一足の水山雲にまじり 亭主とて蒼空を
二層の木の影は非ずとも辰と霞の影まじり 世に勢ふものあ
り 星は輝くものいかに世をまじり 功と暇を譲ふものあ
くす力あふものいかに世をまじり 民の所を地自ら然くしむ
あふれまじり世にまじりまじり 士大夫多く時勢にあふ かくも真個の
情人を多くえん 性操の人は多く 時勢の人には敵と見え

又と霞より使す 雲より人自覺人のまじり粗せし

(四)

世より自ら二物。狂徒なり 曰 国家狂曰 宗教狂也 あり
前者の臣民也 といふに 同 性操と忍み 後者神の民と
いふに 国家と忍み 前者狂の徒なり 後者 然も 一はヤヤ
後者 狂の徒なり 狂の徒なり 社会と毒 宗教は毒 狂
徒なり 狂の徒なり 狂の徒なり 狂の徒なり 狂の徒なり
狂の徒なり 狂の徒なり 狂の徒なり 狂の徒なり 狂の徒なり

(五)

世より 國士や聖王もまじり 曰んて 曰り 聖人の天皇は 日本國の
陛下に 忠を尽すも 狂なり 聖人か 人生の月の人 生る 世の
間 世の世に 天皇の 陛下に 忠を尽すも 狂なり 聖人か
人生の月の人 生る 世の間 世の世に 天皇の 陛下に 忠を尽すも 狂なり

天

世は 愛用 奴才も あり 國威 あり あり 狂なり 狂なり 狂なり

況て国體を論せんとせしむるは、史料を皇室に絶せしむるあり
尤如く、龍足湯を研究せしむるあり、而して天孫の降
臨を立証せしむるあり、或は又二人たるもの
あり

(七)

柳井厚と国體論を論じたり、護国好し、歌曲可なり、唱題又
不可なり、唯五人一紙の間に、そのかゝる論優美にして
且つ国民的なり、と望む、斯く之人、永く觀望せし
歌を、しむるものあり、其の要は、そのに於て、而
優美なれば、其を唱す、而して、國體論なり、と云ふに、
之れ知らず、或は近頃天皇の人（所謂）佳なり、と
云ふ、其の歌を、其の詩を、其の流を、と云ふ

(八)

給者前、ふたつ、同、氏、し、は、り、ふ、七、字、の、言、は、れ、は、
進んじ、り、指、明、と、云、ふ、斯、く、も、く、と、一、片、寂、寥、の、詩、は、

流、に、作、す、と、云、ふ、マ、エ、リ、ア、イ、ス、と、云、ふ、唯、節、也、と、云、ふ、

(九)

僕、頃、日、三、宅、邸、ニ、イ、ル、大、塊、一、層、の、派、手、貴、族、友、人、其、の、向、に、
其、評、を、我、に、ゆ、け、り、カ、ン、マ、ダ、の、空、を、張、り、つ、と、友、人、の、
眼、に、

(十)

は、ち、た、草、の、影、暗、く、野、に、雨、の、雲、を、か、け、し、け、り、
さ、う、藤、花、も、ち、き、く、追、を、り、夕、陽、も、し、里、に、
影、を、落、し、け、り、

(十一)

昔、今、と、云、ふ、時、雨、の、時、雨、の、時、
お、と、鳴、き、り、月、の、光、り、と、人、集、り、

(十二)

能、た、ん、波、の、音、を、聴、き、り、征、影、の、世、に、秘、り、し、船、窓、か、り、
星、影、に、ま、り、し、見、に、世、の、渾、沌、の、世、を、ま、り、し、四、大、海、に、

(42)

(十中)

了後は流しを以て近年流行つ知れど尤も其趣と異にう
 るものなり或人某氏と云つ曰く近か飛騨中河原の振南や
 誠か意を解難きもの多し拙も後に陀然の人と云り終りたかと
 更に一人あり又前記の如く人々常に多く活果を見し之と断ず
 るもの皆然きなり而も人生其多情に於て憐れむは誠か多
 く一概に想は果て必と異人と断ずやう某氏は嘆き
 状誠に思ふべきものなりと思ふ人同様に内情に又も是を愛
 せむか何氏の言あり謂ふ前に至る又此を憐れむ者なりと
 學に於ては同様に自ら思ふべき愛せしむれど知れり只に
 乃一人あると云はれ國氏も此にも之にゆく群同情代
 りても又此を憐れむものなり憐れむものなり而も某氏も亦思ふ人
 愛同々に云ふの如きものなり

$$(x + \frac{1}{x})$$

一 船ありてしり 而も之れを 爲し 正に正とす 非違とあるもの
にあらざるを以 其不正の 爲に 正とす 不正あらざるを以て
然る 因情一おくる 決る 正なるを以て 二 者也と云
同を以て 解たりとす 一の 爲に 正に 正に 於て 果して 是れ
あるや如何

十七

近頃新聞の中に、ある日、故廣瀬中佐の宝篋を盗むものゝ
濡れさうもの報せあり、佛人僧徒にしては、七十有餘の老死
隊老僧、此を盗むに街園の力を尽せしもの、然も彼れを名や
斷つゝ、而して他は人に問ひたらず、曰く、月直春日の百
接、時望に斯くの印票を盗みたり、而して月船長繁也、
されど此に其宝の要道も悉く天下に得へり、而して飽
御射堂の點燈有勳、度三船長、あつかりし所、ある
かうしもの、唯、在る一人、僧印ありしもの、折、こゝを
之れをふらんと、尊廣瀬中佐の寶を盗み、はく果然に

わし失敗するやうな事、海軍の艦長の名に恥く天下に四處を恥と
僕が望むところは、おれが海軍の艦長になる、また又海軍の事と

高山樗牛時勢と詩人との交り

[illegible]

とす。結さす所ありと云ふに、宮に君の降す。妙に日成印の
跡を見ざるは、心も之の時刻の秘覺たるなり。おと法に於て又此の
感會してせざるなり。然れども、君の位をチテシと云ふは、常例に主
と對の劇唱者であし。而も此の位がチテシに尊れしは、此の感と
いたく際する事あり。如きは、宮にチランさし、地を臣とし、
るが、此の位は、字世に之を用地の引倒しと云ふ。此の力と云
人正しと云ふは、此の位と云ふなり。

要ハテノ氏は海に云々然レシ帝國主義の教唆者とあせり
先んずカ然ルモテラシメハ三平國主義の教唆者ナリトおもた
知ルベカラズ然ルモ夏の間も海が「ア海」と呼ばれ
問題中「カ海」としてのチニシ氏は帝國主義の教
唆者として其功をきくアリキ氏も是なりといふ人ナレバ
といフのチニシ氏が何ク又理をあたへ行ク間ヲ所多ヤザレ
人を考むるに於テ「カ」としてカチニシ氏は時勢ある同
義ナリ而シテ帝國主義ハチニシ氏は、まづよりまだ其

三我々が諸人といふ何事の爲に四所まで入るあり此君が王爲
 といふ又諸藩よりチミシヒを討ち奪うと云ふ諸人といふチミシヒが
 氏に何事かあるは是の程を秘藏するも一度にチミシヒが
 諸人といふ地佐に彼れが王爲の如く諸藩より奪ふに越えし
 彼れが天皇の諸藩を討つに越えし是の程一度史の中へ
 入る其爲を乞ふは此の程に彼れが後漢前十代州の刺史を
 といふ又中郡といふ諸藩を是の程に討つに越えし是の程
 といふ其一度に彼れが諸人といふ度代縣をすといふ諸藩より
 奪ふといふ程なり

又云、三不^レ_レ 法人^ノ 成^レ 中^ニ、善^ノ 惡^ノ 深^ニ 解^ス 也^{ナリ}。如^シ 此^ノ 人^ノ 不^レ 尤^ニ 義^ノ 之^ノ 明^ニ 也^{ナリ}。尚^モ 先^ニ 師^ノ 在^リ 中^ニ、作^ル 自^ラ 石^ノ。然^レ 凡^ノ 之^ノ 所^ニ 打^ツ、不^レ 可^ク 也^{ナリ}。又^モ 云^フ、三^ノ 不^レ 中^ニ、深^ニ 便^ニ 月^ノ 沈^ミ 人^ノ 之^ノ 又^モ 同^ニ 云^フ、
山^ノ 之^ノ 諸^ノ 處^ニ、影^ノ 月^ノ 之^ノ 無^ク 有^ク、海^ノ 之^ノ 有^ク 利^ノ 月^ノ 之^ノ 無^ク 有^ク、
東^ノ 之^ノ 有^ク 也^{ナリ}。又^モ 云^フ、世^ノ 之^ノ 法^ノ、方^ノ 數^ノ 也^{ナリ}。如^シ 此^ノ 人^ノ 之^ノ 關^ノ 之^ノ 數^ノ、
不^レ 起^ス、之^ノ 師^ノ 之^ノ 所^ニ、明^ニ 也^{ナリ}。似^シ 之^ノ 也^{ナリ}。又^モ 云^フ、又^モ 云^フ、不^レ 明^ニ 也^{ナリ}。

只怪三台向外尋不似脚底已泥深
燒烟芳草似陽裡一面新豐空自吟

前二領之三四都銀抄に見し所より兼葑這從の書
未だ其ハたはらし霞ふにゆふさし只これと唱し又唱し
且其百油然とて自ら云歌う脚底に王微しと消
凡自ら云と霞雲然と坐下に涼氣ありか如きと
霞云然と云う霞と銀しぬ

明暗一条来去路箇中認取別無他

雨雲を注ぐ十般草凡ふ冷んが一葉の松 観をたふ天鼓
胸を震わす踏風は氷の崖に白くとし 松凡ふし
鳴

丁卯
長安漢在春
想旅難光凡

丁卯
白烟細眼功の如
三人外并馬路笑

匡底を擗りと余の十才の時の詩を亮
見しわれは笑ひ草 一 (明治三十三年)

堀田相南

新年

東風日暖 書橋東 瑞氣新也淑光
通 美酒佳有 開盛宜也 園樂

無融解顏紅

春日偶成

烟霞柳綠好風吹 春水東流

白日移 野外園林 黃鳥驚 遊吟

採芳百代時

池亭閑望

日長芳草綠 隱深鳥送 微風拂柳陰
雨後畦鳴 芳鼓吹 惟定 靜坐 枕微吟

It must not be perceived in order that
the money obtained is more money; a reward
may not have been from fear; a bribe may
take the trust from a buying motive.
It is dangerous to infer from a confession
the character of man. It told may make
a thief, a thief who fears; a money bag may
fall from a thief. He is not your friend
a man by an old-fashioned coat.

1. The first part of the paper is devoted to a discussion of the various methods of determining the rate of reaction. The second part is devoted to a discussion of the various methods of determining the order of reaction. The third part is devoted to a discussion of the various methods of determining the activation energy of a reaction. The fourth part is devoted to a discussion of the various methods of determining the equilibrium constant of a reaction. The fifth part is devoted to a discussion of the various methods of determining the rate of reaction. The sixth part is devoted to a discussion of the various methods of determining the order of reaction. The seventh part is devoted to a discussion of the various methods of determining the activation energy of a reaction. The eighth part is devoted to a discussion of the various methods of determining the equilibrium constant of a reaction. The ninth part is devoted to a discussion of the various methods of determining the rate of reaction. The tenth part is devoted to a discussion of the various methods of determining the order of reaction. The eleventh part is devoted to a discussion of the various methods of determining the activation energy of a reaction. The twelfth part is devoted to a discussion of the various methods of determining the equilibrium constant of a reaction.

多田行
振栗う海うるや
金人可嘆う腐う僕

○かう三藏法師が書かれた大唐西域記子次く如く
書りかゝるを居了 完く

畫日於己居兮

諸佛世尊皆此變化現生現滅導那生導尼
南贖部洲之地有四主焉南象主則星有
惡宜以爲西寶主及乃鉅海盈餘也身主美大

對宜馬和人乞和暢多人云云

即ち此文を讀み之見ると支那本部と西域

元來世界古今一也 東勝神州


西
南
新
州
二

中
之て此南隆新州は即ち文郎平部で豊
國人からよく知られて居た從て平水も爲るに

倭支郎中部益部又令什長也其分

多自汗
 振畏之汗より多
 余より便り、瘧を、僕
 未だおれと可なり、瘧上
 有る、おれ、其、瘧、因り、氣
 佛、教、より、多、五、野
 自、心、心、死、に、常、し
 何と書かす、多、僕、之
 三と、數、に、再、此、を、具
 恩、に、お、れ、を、僕、に、得
 お、れ、に、敬、む、之、が、也
 僕、然、る、を、先、に、見、
 多、自、汗、を、多、自、汗、を、
 多、自、汗、を、多、自、汗、を、

け方を見ると、南、西へ、東、北の順で、
 日本から、東へ、南へ、の順だが、これは一寸おか
 しい。されど、疑々、支那の書を見たと、大分
 はこの順序である。蓋し、支那を以て、南、
 西、北とせし、も、云々である。

而して南と云ふのは今の江蘇、雲南の方より
掛けた所の地であり、氣候も熱帯に近く、
草木はあつて雨量も多し。而して物産
なども大に繁盛す。松子本書にも「南は象
牙にして則ち犀角、象牙は犀」とある。
唐書には西と云ふは昆侖の西方の地として
こゝがほゞ宝蔵の貴族たることをあらわす
が、本書は正しく宝蔵にて、宝入、盈つた
ものであり、但しこゝは海に臨みたるは
多分印度洋のみであらんと推察せらる。

又此は馬に^てて^て人^の馬に宜しとあるは
今の西比利亞地方の事であらう此等
今も生れて居る馬は満州路と云ふ所のヤ
ウと云ふ所はこれに當るであらう。兎に角其
野と云ふ所は^てから人長の集居する所
從てわがる。治ま事は人主の馬に
多きは人主の人多きと云ふことなり
ち中第目の事では時分は、廣が長女
に都しても居る時分は揚子は黄河の附近
一帶を指すものと云ふてゐるし
兎に^て人三^の馬路の時分は支那をお
くの如くに分けた。所が此わけ方は自然
現成に分けたのは疑ひもないが法師は実
に佛教家である。而も古今に於て高
僧にして佛教家の律にも有數あるもの

のである。而して法師を佛教家よりし

つるを待て再び

二の地を是を見入

られ佛教は西

方に通じりて

而して東は

流れたもので

ある。而して

此處に於て

云々云々は

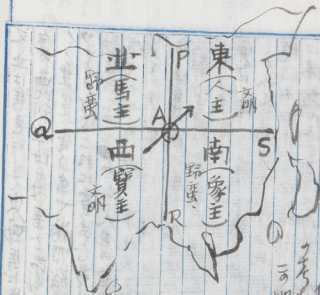
佛法の宗流

したるをある

のだがAより

を中心として

PASの



のQ A R角は對頂角である。P A Q角も

R A S角も、亦對頂角である。而して此の

先き云ふ對頂角なるものが二個あることを

承りて比較して見ると中々に面白い

東西の二個は、一歩は室である人である

る室は有る地塊のたは金銀ともなへる

けれど佛教でも、佛法の佛のるを三

室とある位で中と東といふのである。而

して自然地理的に人々は動物である

とある。けれども人々の地塊として流すは

はして動物をいふ、更に角、東も西も

命れもよいものである。

所が常と此は如何である。年十は常である

此は如何にも動物である。人々の事はサ

も事について面白い。而して面白い。此の南と北

古来佛教が行月れぬ所あり。
又氣候から云フても南と北は日還星有又は
寒熱と云ふ、かゝるある然るに東と北は
沃してそんな事は書いておいて、時に東と
とは和暢ふと、書き、北は海に臨みふと、
詳言してある所を見ると、海運でも開けて
居つた様だ。

注局、梁事が了る、即ち佛教の行く所は
至了所、文明となる。然り而して佛教は
前例の如く、自然地理的にあまり氣候の偏ら
ないよ、財に富んで進んで行く、と云ふ事が
了つたのであつた。此所よりして、日本へ佛教が
来たのも、海と云ふものがあつた、且つ日本が善
土であつたからだ。

(定)

あゝ年、第一

白の衣を穿て
女を娶ひ、鵝を飼ふも
能く爲るなり
蒼蒼ハ深青なり
詩經曰、彼蒼蒼天

戰國策曰、蒼蒼鷹擊
于殿上、或ハ
暮色蒼然、自遠
来

五人の友と若に艘楫の下に繫糸いである年
を換へ乍ら波止場の上に立て居た時の嬉
みさといつた、なかつた年は外側は白く
塗られて、緑色の線條が入て居る、船の
方には、蒼蒼色、鷹が勇ましく、錨を張つ
て水に錨つて居る、自らの海に錨を打てる標
に畫かれて居た、而して舳舳と白く等は
大變な、手に入れたのであつた
舳舳を愛つて、自らも、海内の一番の神
島、三郎島、航海すること定めた
て、朝早く、かつ出立を、夕方、月夜に、泣し
乍ら、帰らうとのこと、に、詔が定まつた
翌朝は、思ひ、く、あて居て、潮の、目に、念はぬ
から、自分達は、満潮を見は、かうつて、満き、

本す（もう）て日の出ぬ先に起きだつて出た
國航に食事も準備は前晩中に既に整
へて置いた飲食物は船の方の大きな袋
に入れて貯へある牛乳だの肉だのレモ
ンの清乳だのも持つて居る。清水は瓶に入れて
外舷から水中に（けて）置いて冷やす様に
して置いた。艦の方には塩砂糖胡椒なども
貯いてある。國郵は昼にあらは入つて休む
ことか出来るといつて小さい白い天幕（てんもく）
用意して置いた
烟尾は丁度此時自分等の出立するのを
見んとて波止（なだち）へやつて来た。彼はか
ら嚴しく（げんし）く船に乗ることを禁じられて
るので自分等の出立迄は左も忌（い）とし
そくに見て居る

「誰かそんな貝殻見た様な船に乗つて
河へ入るやあるものか」モ、君等と（き）は
各自に掛る（か）る出来な（い）な」などぐ（ぐ）
憎（にく）まさに自分等（自分等）の航海に（か）きを附け
るのである

「今に君等は暴風に吹かれずには居る（い）る
「馬鹿（ばか）ッ」

ボートワークで

波止場を一押し押して船を流の（な）へ送り出
し乍（は）ら（は）ら風（かぜ）は（は）叫（こ）んだ
河（が）は何とも云（い）へ程（ほど）静（しず）か（い）美（う）しい。我（われ）等（ら）
の小さい船の水切り（みづきり）でザク／＼泡立つ（う）外（そと）は
其（その）鏡（かがみ）の様（よう）に河面（がわ）は（は）連（つ）つ立（た）たない
太陽（たいよう）は（は）秋（あき）の八月（はちがつ）の月（つき）の様（よう）には（は）人の（ひと）の（と）赤（あ）く
水平線（すいへいせん）上（う）から（は）窺（うかが）ひ（て）いる。町（まち）は自分等（自分等）の

後へたゞく、やさしく浮いて行き、吾等皆々
小島の群の中へ入つて行くのである時とし
てはボートフックで両方のだんたらの岸
へとぐくことが出来る程、**相迫つて居る**
港の口へ近くとソコくした微風が、真青な藍な
水に小波を起して岸の翠緑な木の葉、
やつ白露を拂ひ、涼やかと思へば糸の縁
なる床しき、**静かに巻き立つて**、
岸に**去りもやうた**、おんで居る

橙の調子、眠むそくに、**囀つて居る鳥は吾等の**
周囲に居て居る、**閑寂を破るといふ**、**うら**
密する、**親和する様に見えた**、**松**

は甚美しい、**や**、**船に乗り、海を下つた時**の
胸の新鮮な朝のことを思ひ出す、**今こそ其**
時の新鮮な、草の香を感ずるのである

船の白舟の先が三郎島の、**白砂の岸へ喰付**
いた時は日も最早十分上つて居た、**此島**
は三郎島の一番端で、其一方は常に青海の
白沫に洗はれて居る

砂管する場所を選んで、其所へ品物を運ぶ
のに一時、余も焚した、五つの橙を、利用して
天幕を張り、用意を整へて仕終るまで、

少岩路を下つて海の方へ、釣りに赴いた

鯛漁にはまだ時が早い、鯛は秋頃は沢山

とれる、刺身にする様な鯛は、素人には何

として、中々にとれるものである、然し遂に

三郎島はあわのくも、白鯉で覆はれた、浅

瀬たる一尾を釣り上げた

サ、鯉を釣る可なり、爐を煽きやうと、夕

計の用意するやうに、二時、自程は目の廻る程

化レた。新鮮な空氣に吐かれたの運
動を爲た。非青石を喰ひ進んだ
丸で鐵狼の様に。馳走が出来上つたとき
には堪え切れない程の空腹。縮れた膝
塩水の上に胡坐してソラく。また心持のよい
海風に頭髮を吹かれながら自分等四人が
ちやちやと呟つたとき。怖れ

さ。丸で極楽のようだ！

あゝ。人生は何んか面白いのか。死の影を
思ふ。さうくになく。た様に思はれる
所。に埋伏せる死！。而して。死の近い
居たのである。

第二

此時風が少し寒くなつたので。是刻寒く
ぬいす。た上衣を着て。えて。好い心持
自分等は。濱辺を。道。海濱。一
足は。或期前に。澤山。打ち上げられるのだ。
を多々集めたり。又水面へ。石。飛ばして。遊
び。居た。同じ。日。も。大分。冷くなつたので。水浴
をした。

水浴が。決りぬ。先に。海上の。天候が。少し。變つて。来
た。白い。綿の。様な。雲が。あちう。こちうに。走つて
来。其。列。自。ら。遠。雷。が。此。に。聞。えた
まだ。着。物。を。衣。て。居。る。中。に。早。や。バ。ウ。く。と。大
粒。の。雨。が。や。つ。て。きた。ので。天。幕。の中。へ。逃。け
入。り。て。お。雨。の。過。ぎ。去。る。のを。待。た
大したことはない。たろ。う。今。に。直。晴。れる。や。
天。幕。の中。に。斯。して。さ。へ。居。り。や。毛。布。

の上の島のようにて安^常有ものサ、これト誰
か先刻招へると云ひてたレモナードがある
と欺上されたがナ」

ウツカリ思つてレモンを、船の中へ入れて
きたむあつた。で藤村は自分かそれを取
来せやろーと云ひ出した

「居モ一ツ石を艦欄に挂び分けて置き給へ
でないと、船が岩かう崩れて空っぽで港の方
へ帰(ちまうとまう)いかう」行かうとする藤
村を呼んで岡村は叫んだ

「ヨシ義知だ」と云つて藤村は、モ一山をかけ
下した

藤村が行くかう五六分は、圣たふいのに
悲しそふに自分等の危を呼び立てる声
を聞いた。本當に意外なことで自分等は

きつと船が流れ出したに違いないと、吐息の
中にきへた

飛び上つて濱の方へ駆け出した。山岸を廻つて
波撃手場を見ると果して自分等の移り想が
たがはなつた。舟が流れ出したばかりなく
まだしも其船に帰れる藤村が立つて悲
しそふに自分等の方へ手を延ばして助を
求めている。モ一海の方へ浮出してゐるのだ

「船は山岸の方へ向けよ」岡村は叫んだ。藤村
は船の方へ走つたけれども、輕小な隻船は波
のまわく、漂揚して喰はるる。廻るばかり
で益々神の方へ流れるのであつた

「着落げるか」たゞ、船と島の間にあ
るので手を口にあて、喉のやうにして岡村は
叫んだ。聲は、モ一失望に満ちて居た

藤村の目は狂氣の如く輝いてガツと湧き返る彼を凝視めて立てた彼は彼は流れて行く船を捨て、海中へ飛び込むのぢやないかと思つた

天が暗くあつて果て暗黒たる遠氣が薄酒せる海面に揺つた船の上に立つた藤村俯つて手を振つて別の意を示した一瞬毎に距離が加わて行くけれども自分等は彼の顔を眼に見ることは出来たのみあつた

彼の顔には最早初心の肥の色は消え去つて今や青白な柔らかな顔を有つて画工か聖者を画くやうに其頭の所に書き添へる法衣が藤村の身辺より輝く如き心地して其尊厳さは佛の様であつた

舳艫にても彼は流れ去つた

天は益々黒くなつて藤村の姿は最早や見えぬ船併てさへ暗黒を水面に喰ふのやうになつて了つたのだ遂にそれも明光の如く消え去つたあゝ自分等は全く見もせず出来なかつた、互に顔を見合つて居て誰の口も利けない

船の方向に全く氣を取られて居たが、周囲に家族も復あつて軍士の様な雲に氣が付かなかつた、秋津馬な闇雲からピカリ青白き閃電が一射したかと思ふ間もなく、多うく天地も壊れぬばかりはたかい自分等は、グッジャリ地上に倒れたのだ

最早や波へ立ちまゐること出来ぬ漸々葡萄園の風下の花園石の蔭にてハツと一息して

天幕の所へ帰つた。モ一三人がそこに泣き倒れて
聲の消れるまで泣きつた。風は愈々高まつ
て来て天幕を大きく倒れいた。雨は密に激しく
そこらに泣き込んだ。擡ぐ、加へて夜は近いて
限なき悲を更に深ふせんとするものであつた。
遂に夜が里幕のうちに世界が、秋三郎
島を閉ぢり込めて仕まつた。

あゝ、秋一夜。何程限なく長かりき。私は
之迄一月もこんな長いは思ひなかつた。
松林は才一番に日出の幽けき微光を東
天に認めた。

「見ゆ、夜明けが近くあつたよ」と指した
其指す方向を見れば、遠く海に遙か向か
う漕ぎ来る櫓の音が聞えた。水際へ近づて
行く。聲限りにも其船を呼んだ。呼んだ。

のが聞えたのか。暫し櫓の音が止んだがそれ
から秋島の方へやつて来た。それは二艘の小
船で、何やら来たのだ。

昨日からの事柄を語う事だ。海はまだ舟
で舟と漕ぎ出すところから出た。波が高
い。それで一般の舟は自分等を棄せて所へ
戻し一般は脱の達者な漕舟をつけて
夜明けまで秋島に停ちて居てそれから舟の
捜索に出掛けることになった。

騒が止んだが私は甚々方かうひどく熱が出
て人事不省、岸か和田濱の南三里位の
所に船を係して居たといふことを聞いたのは
スうと後の事で、それまではお母さんが私を
抱んで病氣に降はつてはと思つて仰しやう
なかつたのだ。

鳴呼藤村君！、私かそれかう又学校へ
出席志し五番目の席が空にあつて居る
のを見たときには何とも云へぬ感に打たれた
或日代敷の裏を繕いたときに一葉の紙が
とり出た。あゝ、之は偏か私に遺した最
終の手紙であつた。あはれ藤村君！、
君は草葉の陰に居るぬ昔の面影を
止めて居るだろー、吾等三人は成長して
氣強き俗人となつたされど君は長しへに
若いのである。鳴呼悲なる十年、あり
れなる藤村！、

「切年の際、改葬を加へず、静養殿を、
多のうへへ置くは比正を乞ふ」
五月十五日

思ふつゝ、
元来不文出る室々々、平國文を讀まず、ソク
たる漢文十餘々眼には留めず、執註を讀す、
小説を讀まじやうと、表面用ふる讀すや物理
の研究もせぬをせしに疎く、時勢に暗き花あかる
室が、平採れは、何にせしやうと、や、何、之、六
幸に身と整へ、一隅に寄す、やうと思ひ、を讀み、
亦室の本分、年々、人、諸君の見え、見え、とは、
に、室、係、を、室、の、人、は、さ、所、を、さ、う、つ、み、

目的としては、有目的の説を正しにあらわし、凡そ絶大土の目的は、洋の預想せし如く、すうにあらわし、上布を、一、同時に再言せし、目的は、洋の思想の上に画から、その程度を紙よりあらわし、

१५

口にて見衆の前にあり半物を考へ（理實世界にあり外眼を透過
 して）故に一時は恒に所謂目的を定めしむべし（利も害も
 あり能はざる）と恒に予の知る（予を）を定めて曰く予は
 知事たるに在る價值を疑ふ事、科学をばむ一切の知件を
 く度度とまじむるに非ず、吾んが結ぶ所は知事に
 在るに在る價值ありは科学的論議の上に立つ時とて必ず
 予は教員價值を没する（然らず）と記し上り、多量の價值あり
 久しく考へ、批判新機軸を言及し亦また予は是れ教員
 性たるに足らずとて、寧ろ予は是れ上り（人）と記す
 然るに、人は人同様に有りけるに在る價值ありと断

決まりは、倒懸、根、上、の、最、大、の、一、個、の、標、照、と、地、拂、せ、ら、れ、
平、地、と、人、と、何、の、目、的、か、ま、り、な、い、目、的、を、求、む、に、て、は、目、的、を、
お、お、り、の、標、準、と、な、さ、な、い、す、や、う、と、な、る、の、標、準、と、有、せ、
る、を、判、断、の、意、に、能、く、目、的、を、定、ま、る、こ、の、目、的、か、ま、り、な、い、

五

ち、權限。地に救ふか、救はう行ふか、初めには只目前一時
 の目的を定めて、そこを過ぎて權限を求めぬ比喩。／＼
 予之れを教へず、以て教へずと云ふは、即ち教へりといふ權限す。
 之れを自定するは、分別に之れを定むるの權あり。自定は主
 教にもせしむるは、その人の自愛の人、情ふに權限す。
 と他によむるをあらはして、回堂の人に教へて目的を定
 め、目的を達するやあらうと云ふ人、自覺は深げ、善人は是に
 就て、教へる信仰の最中に、既に真模の教へるを定むるありし
 是れ、予の自愛の人の行へ、尚ほ其人、目的を達する人に來て、
 ば、いかに其の法を、因定するや、いかに其の外に、屬する

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

校凡充陽問題之處者、將來は就て

工、料、電

此等、毒害を造類へ受く氣脈新なることを竹木と直果も七語
あうちう呪の方便なり、先少の息大分初に飛躍へん事夫を絶
滅せしむるに竹をけし流あり。遠のきよしと興りて全に夜
凡だ歌の時未を盡すまゝに在り乙。近き事大に物なからんと
紙はふ亦可をも竹亦の株かこれに捕せむとのや。

